前橋学ブックレット 1

日本製糸業の先覚 速水堅曹を語る

日本で最初の洋式器械製糸所の開設、官営富岡製糸所長、そして、日本初の生糸直輸出専門商社を興すなど、その生涯を日本の製糸業の発展に捧げた人物を語る

東京大学名誉教授
石井寛治

速水家子孫
速水美智子

東京外国語大学名誉教授
内海　孝

前橋市歴史文化遺産活用室長
手島　仁

上毛新聞社

BOOKLET

前橋
歴史散策ガイドブック
イラスト
©井田ヒロト

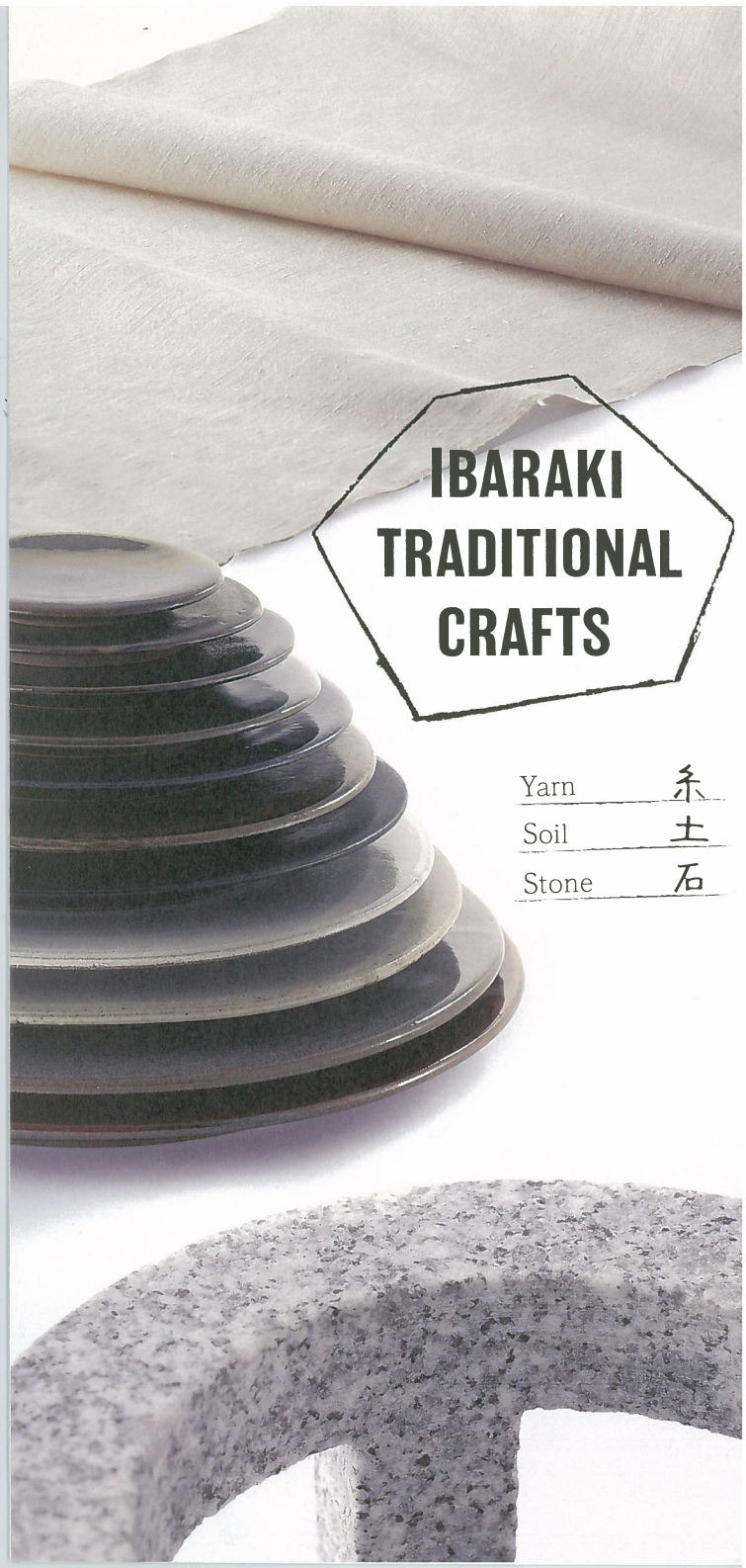
ようこそ

ゆうき

結城市

YUKI CITY GUIDE MAP

観光ガイドマップ



IBARAKI TRADITIONAL CRAFTS

Yarn 糸

Soil 土

Stone 石

ゆうき着楽会

Yuki Kirakukai

ゆうき着楽会とは？

平成27年5月にきもの着付け支援団体として設立しました。ユネスコ無形文化遺産に登録された「結城紬」を地域資源として活用し，市のＰＲを行うとともに，着付け支援を行っています。結城駅北口にある市民情報センター１階のゆうき紬着付け処「着楽」を拠点に活動しています。

きものの匂ふ街
十日町きもの月間
2018

～職人探訪～

十日町きものGOTTAKU

平成30年 5月 17(木) 18(金) 19(土)

全国初きもの工場見学イベント開催！
きもの総合産地 新潟県十日町市の
きもの工場を見学できる**特別な3日間。**

美しい糸、生まれるまち 岡谷 OKAYA

第22回

2018 シルクフェア in おかや

シルククラフト展
全国のシルク製品が
レイクウォーク岡谷に大集合!!

詳しくはHPにて!

シルクのまち
岡谷を観光する
絶好の日です!!

4/29(日)
9:00〜16:00
会場によって時間が異なります

入館料無料

無料循環バスを
ご利用ください

無料循環バス運行案内

シルクファクトおかや(発)→吉田館(㈱ストリーム)→
蚕糸公園バス停→ほっとサロン心和→岡谷絹工房→
JR岡谷駅前→旧林家住宅→初代片倉兼太郎生家→
シルクファクトおかや(着)

発時刻(午前50分間隔、午後30分間隔で運行)
9:10、10:00、10:50、11:40、12:50、13:20、13:50、14:20、14:50、15:20、15:40、16:10

スタンプラリーに参加しよう!

近代化産業遺産群巡りツアー

バスで近代化産業遺産群を解説付きで巡れるよ!!

今井家住宅 — 旧市役所庁舎 — 旧山一林組製糸事務所 — (株)金上繭倉庫 — 蚕霊供養塔(照光寺) — 初代片倉兼太郎生家 — 旧片倉組事務所

集合場所　シルクファクトおかや前受付
時　　間　10:00〜12:00
定　　員　23名(先着順)
ガ イ ド　シルク文化協会

参加費 500円

この日しか見られない
今井家住宅や初代片倉兼太郎生家
旧片倉事務所は必見♪

まちあるき糸街西回廊

試食もついてお得だよ♪

岡谷の老舗に立ち寄って
お店の歴史やまちの歴史も聞けるよ!!

旧市役所庁舎 — 丸山タンク — ヌーベル梅林堂 — 旧山一林組製糸事務所 — (株)金上繭倉庫 — 蚕霊供養塔(照光寺) — 旧林家住宅

集合場所　シルクファクトおかや前受付
時　　間　12:30〜16:00
定　　員　20名(先着順)
ガ イ ド　近代化産業遺産を伝える会

参加費 500円

おかやのまちの歴史を
歩きながら教えて
もらおう☆

〈申込方法〉4月2日(月)〜実行委員会事務局へ電話にてお申込下さい(☎0266-23-3489)。また、参加費は当日受付にてお支払い下さい。

【主催】シルクフェア実行委員会

【協賛】(一社)岡谷工業高等学校同窓会　蚕糸懇話会　㈲ハラダ　味澤製糸㈱
【協力】国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構　片倉工業株式会社　中央印刷㈱
NPO法人 くらしとバイオプラザ21　レイクウォーク岡谷　信州シルクロード連携協議会

お問い合わせ
シルクフェア実行委員会事務局(岡谷蚕糸博物館内)
TEL 0266-23-3489　FAX 0266-22-3675
http://www.silkfact.jp/
✉hakubutsukan@city.okaya.lg.jp

伝統ある日本の絹文化を未来へ……

日本絹文化フォーラム2018

Japan Silk Culture Forum

2nd

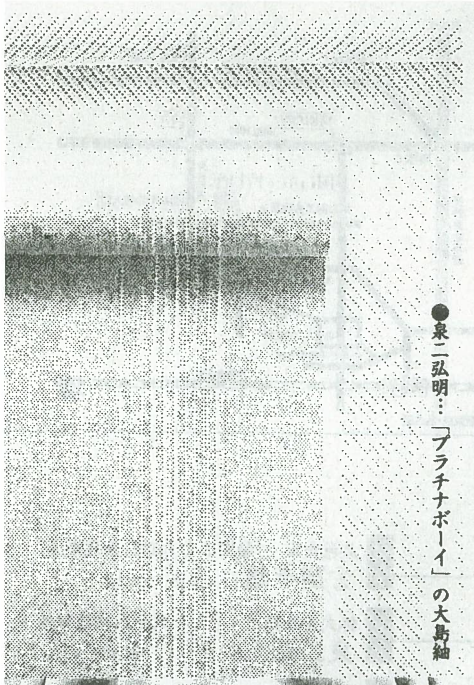
おかや開催

●テーマ

「絹の神秘を纏う」

絹文化フォーラム」は、全国的な規模で絹文化に関する講演や情報交換を行う場として、生糸の一大生産地としての歴史を持つ岡谷の地で毎年開催いたします。蚕に始まる絹文化と歴史を学び、その技術をいかに継承していくか、未来に繋がる発信となることを願っています。着物や絹製品を身につけてご参加いただきますよう、お待ちしています。

日本各地には、シルクの歴史を味わい、その素晴らしさと魅力を感じ、新しい商品づくりなどにも積極的に取り組む方々がいらっしゃいます。このような中で「日本

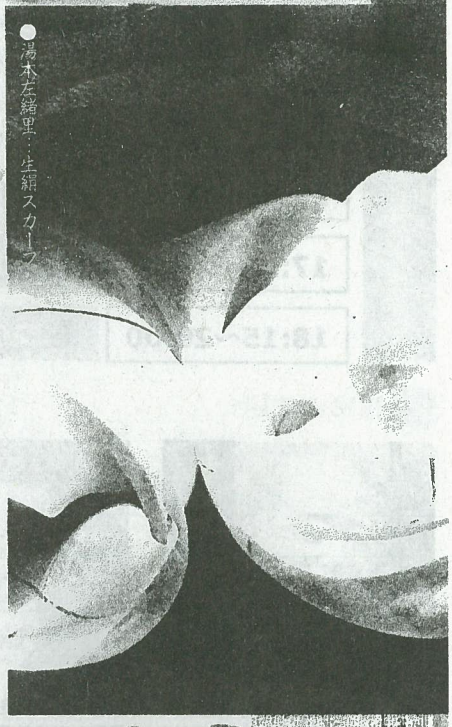


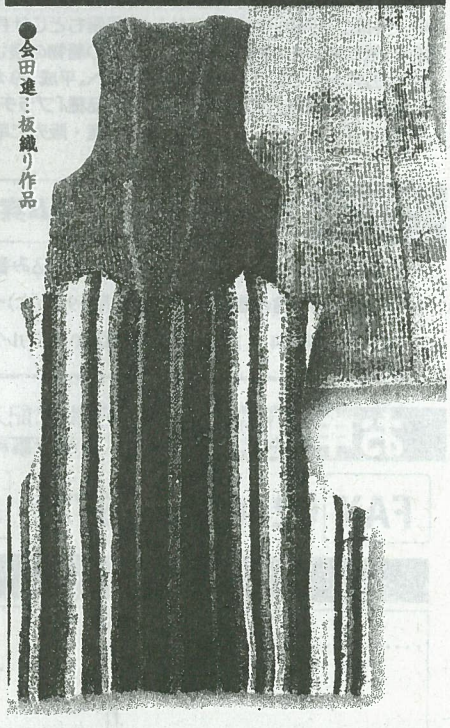
●泉二弘明…「プラチナボーイ」の大島紬

●中谷比佐子…生糸商標をあしらった帯

●美しい生糸繭

●湯本左緒里…生絹スカーフ





●会田進…板織り作品

2018

4.28 土曜日

13:00～

12:00開場・受付開始

会場●岡谷市文化会館カノラホール／小ホール

（長野県岡谷市幸町 8-1）

定員●300名

（要事前申込み／参加費・テキスト代無料）

主催●日本絹文化フォーラム実行委員会（NPO シルク文化協会・岡谷市・岡谷蚕糸博物館・岡谷商工会議所・蚕糸懇話会・岡谷近代化産業遺産を伝える会・岡谷絹工房で構成）

後援●（一般財団法人）大日本蚕糸会・日本シルク学会・信濃毎日新聞社・長野日報社・岡谷市民新聞社・NHK長野放送局・SBC信越放送・abn長野朝日放送・エルシーブイ株式会社

手織りに賭けた男

伝統の活路 足で拓く

存在感のあるクスカの手織りネクタイ

京丹後市の八丁浜に着いた。楠泰彦さん（41）はサーフボードを抱え、早朝の日本海に向かった。朝日に照らされた丹後の海は、青のグラデーションが美しい。砂地はエメラルドグリーンに輝く。楠さんがこよなく愛するこの海の、幾重にも重なる青の世界を表現したのが、手織りのネクタイ「タンゴブルー」だ。ふっくらと織り上げた質感は、手織りでこそなせる風合い。首に巻くと、ぽこぽことした立体感が指に伝わる。結び目を締めると「キュッ」と音がした。

「三角形の絹の繊維がきれいに並んでいるから、こすれると音がします。絹鳴りって言うんです。大事な商談はこれを締めて、『よし行くぞ』って気分で出発するんです」。そんな楠さんは、与謝野町岩屋の織物工場「クスカ」の3代目。創業は昭和11年。祖父の時代は町中に動力織機の音が響き、丹後全体で年間約1000万反の白生地を織っていたが、和装の衰退は進み、父の時代には5%にまで落ち込んだ。落日の産業。楠さんも「自分がそこで働くなんて思ってもいなかった」という。

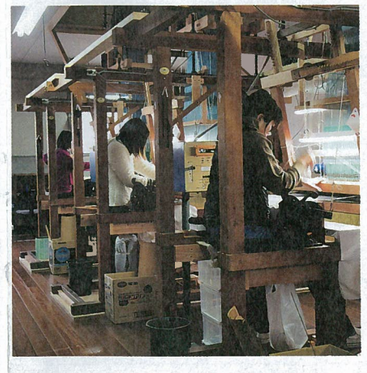
高校卒業後にサーフィンと出会い、東京の建設会社で働き始めてからも良い波を求めて国内外を飛び回っていた。十数年前に与謝野町に帰郷した時、工場で父と母の背中を見た。昼夜を問わずに必死で働いているのに、売り上げは伸びない。現実と向き合った楠さんは「どうせ自分の代で閉めるのなら、思い切って挑戦しよう」と思い立ち、京都府織物・機械金属振興センターで織物の基礎を学んだ。同時に手織りのネクタイを主力製品にし、2010年から8年をかけてブランド化を試みている。売り上げはここ2年連続で2倍近いが、異色の成長の裏側には不毛とも思えた日々があった。

手織りネクタイは母・八千代さん（72）が織っていた。楠さんはそれをユナイテッド・アローズ原宿本店に売り込んだ。ネクタイは結び目で強くこすれる。「毛羽立ちを減らしては」と助言され、強くてしなやかな糸で織り直して再び東京へ。色合いも海の色の再現性を高めた。そんなトライを繰り返して店においてはもらえたが、価格は高級品並み。全く売れず返品になった。それでもあきらめなかった。店を巡り、開店準備が一段落した店員に手織りネクタイの魅力を語った。店員が興味を持ち客に薦めると、少しずつ売れるようになった。次は銀座の高級専門店「和光」へ。織り手が働く動画を見せると、担当者らは「ネクタイを手機で織るなんてありえない」と目を丸くした。紳士用品部のバイヤー、柴田沙樹さん（31）は工場で見た光景が忘れられない。「鶴の恩返しのようでした」。和光限定モデルの生産が始まり、翌年に発売するとすぐに完売。「反応は予想以上。凹凸感のある手触りに気づいたお客様に『実は手織りなんですよ』と言うと、『えっ？ それでこの値段？』と驚かれます。うちの社員も気に入って買っています」。クールビズが定着してネクタイの生産量は10年前の半分に落ち込んだ。そこに名乗りを上げる事業者はほとんどいない。人脈があったわけでもないが、楠さんがしぶとく売り込みを続けたのは「存在感のある一本はどんな時代でも、勝負する男に必要だ」という信念があったからだ。

工場横のせせらぎが雪解け水を集めて流れる。事務所の扉を開くと手機が並び、カタコン、カタコンと小気味よい音を立てている。タイムスリップしたような丹後ちりめんの里で、楠さんは20年先のロードマップを描く。まずは2年後。五輪の後の東京で店を開き、そして香港、ニューヨーク、イタリア・フィレンツェ、最後は岩屋に。世界を相手に勝負するために、手織りの技術者を育てて増やしたいと思っている。

10年近い時を経て、丹後ちりめん300年の伝統に活路が見えた。この道を進むには、ぶれないデザインが不可欠だ。時代（ひと）を拓く男たちが求めるネクタイは、輝きと奥深さと緻密さを兼ね備えた一本だ。発想の原点は、目の前に広がる日本海にある。アイデアとの出会いを求めて、楠さんはきょうも波に乗る。

楠泰彦さんと丹後の海。手織りネクタイの原点は、ここにある。左・織りの具合をルーペで調べる楠八千代さん。地道だが品質を保つために不可欠な作業だ。右下と左下・織り手には若い女性が多い。子育てと両立しつつ、織り上げた達成感を味わっている



東京の建設会社で働き始めてからも良い波を求めて国内外を飛び回って

を巡り、開店準備が一段落した店員に手織りネクタイの魅力を語った。店員

手織りに賭けた男

銀座のランドマークの高級専門店がほれ込んだネクタイがある。ふっくらした質感と深みのある色合い。「それ、手織りなんですよ」。店員の話を聞いて驚かない客はいないという。そのネクタイは、与謝野町で織られている。手機を再生し、現代が求める形に進化させる二人の男がそこにいた。

クスカのネクタイには生みの親がいる。手織りの道40年の「京の名工」、茂籠龍一郎さん（80）。今も帯を織りながら手織りネクタイの成長を見守る。

夕焼けを描いた「つづれ織り」。茂籠さんが30年前に手がけた作品だ。「経（たて）糸をおもりでピーンと張り込んで緯（よこ）糸で包み込む。機械だと糸が切れるだろうな。人の『手加減』があるから織れるんだ」。京都・西陣からはいまだに「あれがほしい」と声がかかる。「手織りは時代を選ばないんだよ」。静かに語りながら、茂籠さんは手機のそばのCDデッキを再生させた。シャトルが刻む3拍子には演歌が似合う。カシャーン、トン、カシャーン、トン……。窓の外は牡丹雪が舞っていた。

手織りを始めたのは1977年。ガチャマンと呼ばれた時代だ。織っただけもうかった。茂籠さんも動力織機で量産していたが、西陣で職人が手機を操るのを見て、「自分はこれがいい」と思った。日曜大工が好きで必要な道具は自分で作っていた。木製の手機を改造して、自分しかできない織物を生み出すことに可能性を感じたのだ。

だが生産量は格段に減った。「今ごろ手機きゃあ?」。人は笑ったが、確かな手応えがあった。展示会に出るとバイヤーが「手織りじゃないですか」と飛びついた。次々と注文が舞い込み、納品が1年待ちの時もあった。一時は60人の出機を抱え、丹後各地を飛び回って教えていた。

ただ、手の込んだ帯は1本織るのに1カ月かかり、人件費を考えると非常に高価になる。中国に工場を据え、コストを抑えて安く売る体制が広がると手織りの需要は先細った。

そんな中、クスカの楠八千代さんから「手機を組んでほしい」と頼まれた。岩滝の機屋から焼却寸前の手機を引き取ったという。茂籠さんが組み立て方を教えて使えるようになると、西陣から「ネクタイを手織りしてくれないか」と八千代さんに依頼が来た。茂籠さんはネクタイの生地を試作してクスカに通った。八千代さんは「織りの技術も心得もすべて茂籠先生に教わったんです」と振り返る。

八千代さんの次男、泰彦さんが帰郷したのは数年後。販路開拓に乗り出し、ネクタイに特化させる試みを始めた。一流ブランドと同じ価格帯。問屋に卸さず直取引して収益率を高め、労力に見合う織り賃を確保した。

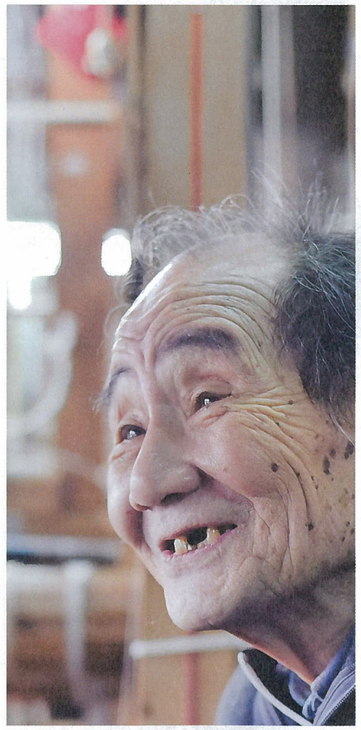
帯なら一日1㍍程度しか織れないが、ネクタイならそれで2本分の生地になる。「これなら何とかなるかもしれん」。茂籠さんも希望を抱いた。何より意欲ある若手が育つのがうれしい。織り始めて1年目の溝口望さん（36）は、自分で織り上げた生地を両手に取った瞬間が好きだ。「お客さんの勝負ネクタイになるのだから、私も丁寧に織りたいと思います」

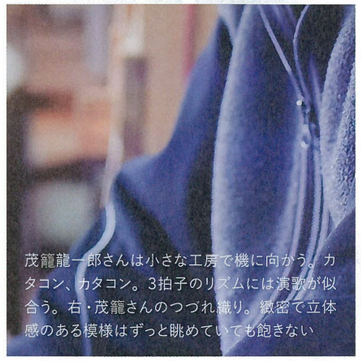
帯から手織りのネクタイへ。大胆な転換は、泰彦さんの常識にとらわれない発想と突破力があってこその試みだった。そしてその礎は、手機を愛した茂籠さんが築いたものだった。昔話の時代から続く機織りの技は、西陣にもほとんど残っていない。茂籠さんは希望を抱いて町役場に申し出た。「今ならまだ間に合う。私の技術を伝えよう」。同町四辻の織物技能訓練センターには手機が十数台ある。町はそれを使って手織りの技術者を養成する講座を始めようとしている。

空はきょうも鉛色。工房の外には粉雪が舞い落ちる。「追いかけて、雪國……」。CDデッキから、こぶしの利いた演歌が流れてきた。茂籠さんは黙々とシャトルを操る。20年後も手機の音が聞こえるまちを夢見ながら。

技の継承「今しかない」

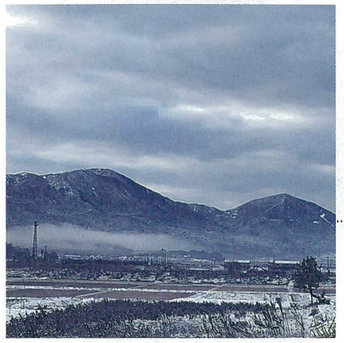
茂籠さんの代表作、夕焼け（左）と波





茂籠龍一郎さんは小さな工房で機に向かう。カタコン、カタコン。3拍子のリズムには演歌が似合う。右・茂籠さんのつづれ織り。緻密で立体感のある模様はずっと眺めていても飽きない

あなたの絶景



山と田んぼ yumichancow さん

雪が降り積もる加悦谷平野。見慣れた景色は一番の絶景かもしれません。「あなたの絶景」は今回で終わります。数多くの投稿ありがとうございました。（編集部）

読者プレゼント

クスカ フレスコタイ（タンゴブルー）：1名様

「うちのまち」第8号をお読みいただきありがとうございました。ご感想や取り上げてほしいテーマなどを、はがきやメール、右のQRコードでアクセスできるアンケートフォームのいずれかでお寄せください。抽選で1名の方に左記のプレゼントをお贈りいたします。2018年3月31日消印有効。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。メール・はがきの場合は、お名前、ご住所、電話番号、ご感想を明記の上、下記までお願いいたします。

うちのまち 第8号　発行日：2018年2月23日　企画・文・写真：安部拓輝（毎日新聞社）　編集・写真・デザイン：青柳聡史　ロゴデザイン：田子學（エムテド）　制作：毎日新聞社　発行：与謝野町　ご意見やご感想、バックナンバーのご希望は、与謝野町商工振興課（与謝野町岩滝1798-1 与謝野町役場岩滝庁舎、shokoshinko@town.yosano.lg.jp、0772・43・9012）へ